千葉市

園 生 新 山 遺 跡

２００７

独立行政法人　都市再生機構千葉地域支社
財 団 法 人　千 葉 市 教 育 振 興 財 団

千葉市

園 生 新 山 遺 跡

２００７

独立行政法人　都市再生機構千葉地域支社
財 団 法 人　千 葉 市 教 育 振 興 財 団

例　　言

１．本書は千葉市稲毛区園生町1107-１他に所在する園生新山遺跡の発掘調査報告書である。

２．発掘調査および整理・報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の委託を受け、千葉市教育委員会の指導のもとに、（財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。

３．発掘調査の期間・面積・担当者は下記の通りである。

確認・本調査　平成15年８月１日～平成16年２月13日　調査面積：1,280㎡/12,785.38㎡
担当：長原亘

本調査　平成18年７月26日～平成18年８月31日　調査面積：1,200㎡　担当：山下亮介

整　理　平成18年６月１日～平成19年２月28日　担当：田中英世

４．本書の編集および執筆は田中が行った。

５．遺構の写真撮影は発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は青柳すみ江が行った。

６．石器の石材鑑定は、中村理科工業会社製「岩石標本」により田中が行った。

７．貝類の鑑定は松本英一・小山和男が行い、村田六郎太氏（千葉市立加曽利貝塚博物館）の協力と、鶴岡英一氏（市原市文化財センター）の助言を得た。

８．出土資料及び調査記録等は千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。

９．発掘調査から報告書刊行まで、下記の諸機関・諸氏の御指導・御協力を賜った。感謝申しあげる。
千葉県教育庁文化財課　千葉市教育委員会文化課　千葉市立加曽利貝塚博物館　市原市文化財センター
独立行政法人都市再生機構千葉地域支社　鶴岡英一　村田六郎太　簗瀬裕一

凡　　例

１．本書の遺構番号は原則調査時の番号を踏襲している。

２．本書で掲載した遺構図等の方位は座標北である。公共座標の基準は、日本測地系に基づいている。
　標高については、海抜高で表示した。

３．各遺構の調査区内における位置は、小グリッドを基本として表示している。

４．遺構・遺物実測図の縮尺は基本的に下記の通りとし、図中にスケールで表示した。
　　竪穴住居跡１/60　土壙１/40　　復元土器・大形土器片１/４　土器片・土製品１/３　　石器１/３

５．遺物観察表の色調は『新版標準土色帖』を用いて表記した。

６．遺物観察表の数値で、口径・底径の（　）は復元推定値を、器高の（　）は残存高を表示している。

７．写真図版の遺物スケールは縮尺不同である。

目　　次

例言
凡例
Ⅰ．　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 1
　１．遺跡の位置と立地 …… 1
　２．調査の方法 …… 5
Ⅲ．　検出された遺構と遺物 …… 5
　１．竪穴住居跡 …… 5
　２．土壙 …… 7
　３．屋外埋設土器 …… 13
　４．調査区出土遺物 …… 13
　　Ａ．縄文土器 …… 13
　　Ｂ．土製品・石製品 …… 14
Ⅳ．まとめ …… 14

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡分布図（１）…… 2
第２図　周辺の遺跡分布図（２）…… 3
第３図　遺構配置図…… 4
第４図　第１号竪穴住居跡・出土遺物実測図… 6
第５図　第２号竪穴住居跡・出土遺物実測図… 7
第６図　第１～６号土壙実測図…… 8
第７図　第７～17号土壙実測図…… 9
第８図　第１・３・４・７～11・16号土壙出土遺物実測図…10
第９図　第６号土壙出土遺物実測図……12
第10図　屋外埋設土器実測図……13
第11図　調査区出土遺物実測図……14
第12図　園生新山・狐塚西遺跡周辺地形図……15
第13図　第１号土壙出土貝類組成グラフ……17

表　目　次

第１表　遺構計測表……16
第２表　第１号土壙出土貝類集計表……17

写　真　目　次

PL１　調査区全景
　　調査区近景
　　確認調査状況
　　本調査状況
　　第２号住居跡貝層検出状況
　　第２号住居跡
　　第１号土壙
　　第２号土壙
PL２　第３号土壙
　　第３・４号土壙
　　第５号土壙
　　第５号土壙貝層検出状況
　　第５号土壙断面
　　第７号土壙
　　第８号土壙
　　第９号土壙
PL３　第10号土壙
　　第11号土壙
　　第12号土壙
　　第13・14号土壙
　　第15号土壙
　　第16号土壙
　　第17号土壙
　　屋外埋設土器出土状況

ＰＬ４　第１・２号竪穴住居跡出土遺物
第１・３号土壙出土遺物
ＰＬ５　第６号土壙出土遺物
第４・７～10号土壙出土遺物
屋外埋設土器
ＰＬ６　調査区出土遺物
第１号土壙出土貝類

Ⅰ．調査に至る経緯

独立行政法人都市再生機構千葉地域支社より、千葉市稲毛区園生町1107－１他に所在する園生団地建替事業に先立ち「埋蔵文化財の所在の有無および取扱いについて」の照会が千葉市教育委員会教育長あてに提出された。市文化課が現地踏査の後に試掘を行った結果、遺構と遺物の存在が認められた。これに基づいて市文化課と事業者とが協議を行なった結果、遺跡の規模および性格を把握するための確認調査を実施することで合意に達し、平成15年８月１日から（財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターが確認調査を実施した。その結果、縄文時代中期の住居跡と土壙を検出し、この結果に基づき、市文化課と事業者が協議した結果、建替工事のスケジュールにあわせ、順次本調査を実施することになった。本調査は、事業者である独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の委託を受けた（財）千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターが、平成15年８月１日～平成16年２月13日に確認調査と12号棟部分の本調査を、平成18年７月26日～平成18年８月31日に11号棟部分の本調査を実施した。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

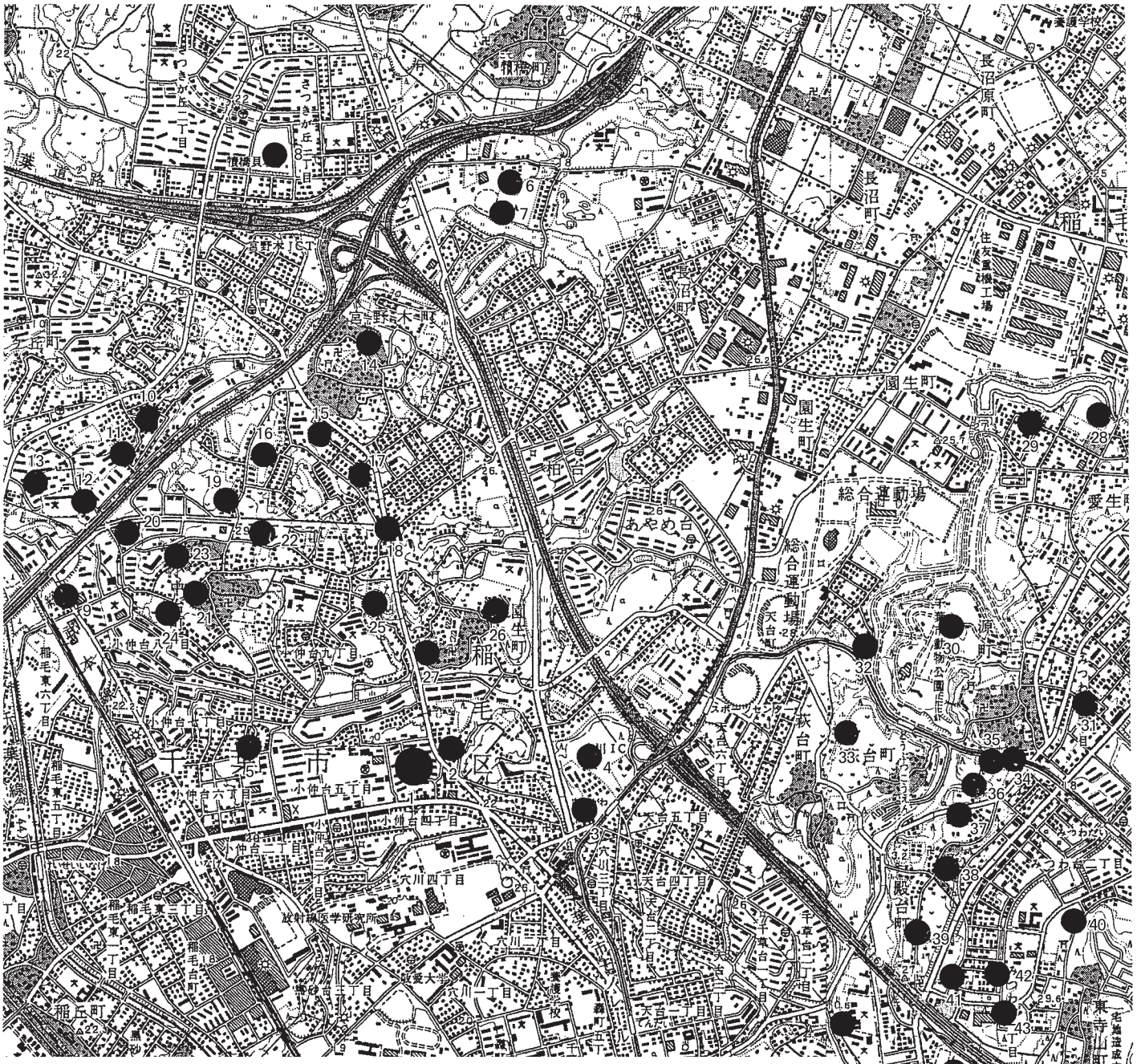
１．遺跡の位置と立地（第１・２図）

園生新山遺跡は、ＪＲ稲毛駅から北へ約1.5㎞の千葉市稲毛区園生町1107－１他に所在する。

千葉市は房総半島の西側に位置し、その大半は比較的平坦な下総台地により占められている。台地は東京湾に注ぐ花見川、都川、村田川と、印旛沼に注ぐ鹿島川の浸食作用により樹枝状に発達した解析谷や沖積地が複雑な地形を呈している。

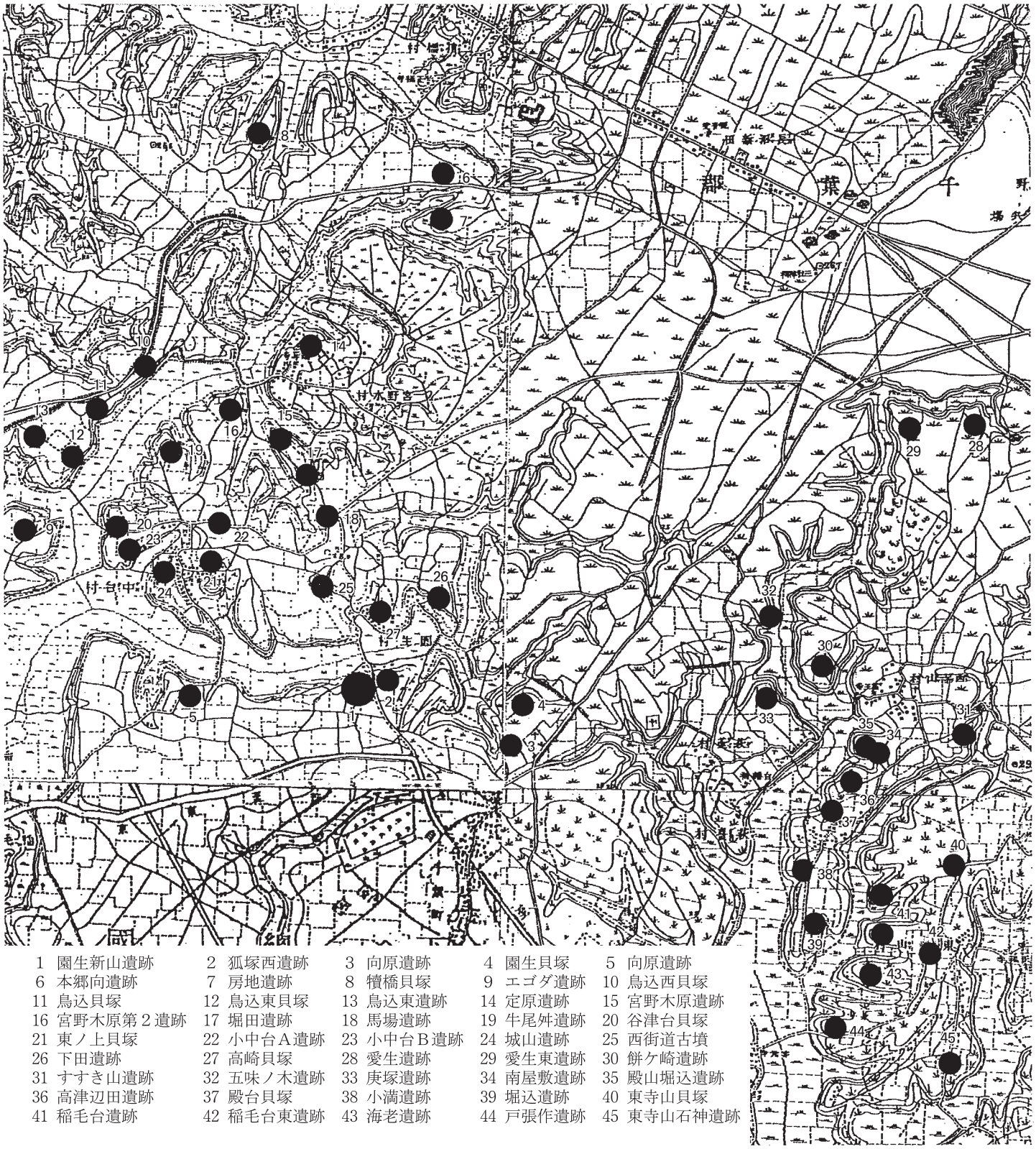
園生新山遺跡は、花見川と都川の間の、花園川の園生支谷に位置する。花園川は、北側の宮野木支谷と南側の園生支谷が合流して東京湾に注ぐが、遺跡は園生支谷奥の、標高22～25ｍの台地に位置し、周辺には多くの遺跡がある。

先土器時代では､本遺跡の北200ｍの牛尾舛遺跡(19)からはナイフ形石器を主体とするブロックが１ヶ所、北500ｍの馬場遺跡（18）からナイフ形石器主体とする１ブロックが検出されている他、谷津台貝塚（20）や鳥込東（鳥喰台）遺跡（13）から遺物が採集されている。縄文時代早期では宮野木支谷北岸に、茅山式期の小貝塚を形成するエゴダ遺跡（９）・鳥込西貝塚（10）・鳥込貝塚（11）・鳥込東貝塚（12）・鳥込東（鳥喰台）遺跡（13）等の遺跡から炉穴が検出されている他、園生支谷南岸では井草・夏島式土器を出土する向原遺跡（３）が存在する。前期では、関山式期の地点貝塚を伴う谷津台貝塚（20）がある。中期では、宮野木支谷の牛尾舛遺跡（19）から加曽利Ｅ３式期の住居跡17軒、馬場遺跡（18）から加曽利Ｅ３式期の住居跡１軒、宮野木原第２遺跡（16）から加曽利Ｅ２式期の住居跡１軒、定原遺跡（14）から加曽利Ｅ２式期の土壙４基が検出されている。後期では、園生支谷では、称名寺式期～堀之内１式期を主体とする地点貝塚の東ノ上貝塚（21）が存在する他、本遺跡の東側に隣接した狐塚西遺跡（２）で称名寺式期の住居跡２軒が検出されている。中期末葉～晩期中葉の大型馬蹄形貝塚である園生貝塚（４）が園生支谷の最奥部に、犢橋貝塚（８）が花見川水系に臨む谷に形成される。晩期では園生・犢橋両貝塚の他に、宮野木支谷最奥部の房地遺跡（７）から最終末期の千網式土器が出土している。この他に、検見川泥炭層遺跡・落合遺跡からは後期（加曽利Ｂ式期）と思われる独木舟や櫂及び弥生時代後期の大



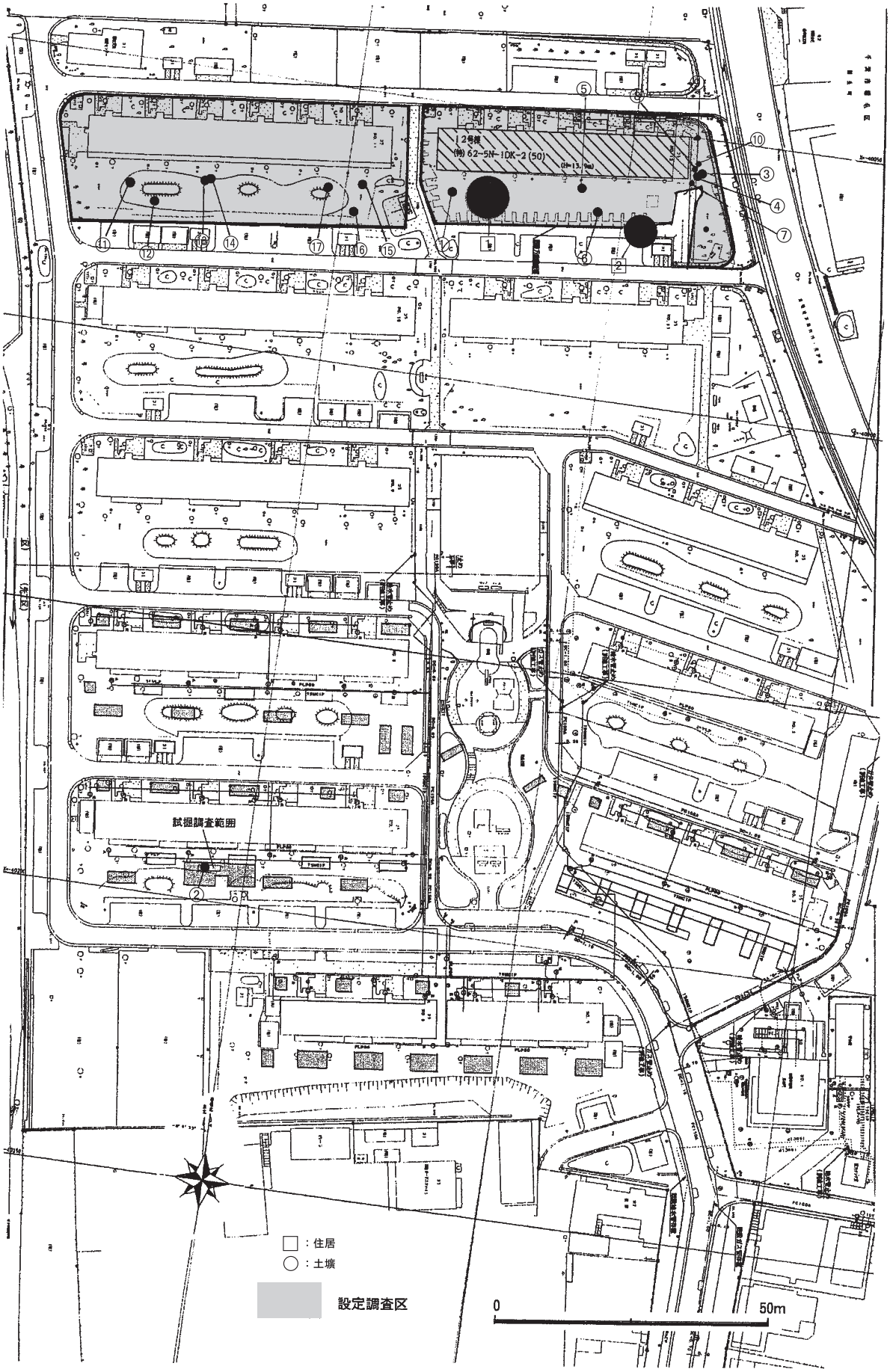
1 園生新山遺跡	2 狐塚西遺跡	3 向原遺跡	4 園生貝塚	5 向原遺跡
6 本郷向遺跡	7 房地遺跡	8 犢橋貝塚	9 エゴダ遺跡	10 鳥込西貝塚
11 鳥込貝塚	12 鳥込東貝塚	13 鳥込東遺跡	14 定原遺跡	15 宮野木原遺跡
16 宮野木原第２遺跡	17 堀田遺跡	18 馬場遺跡	19 牛尾舛遺跡	20 谷津台貝塚
21 東ノ上貝塚	22 小中台Ａ遺跡	23 小中台Ｂ遺跡	24 城山遺跡	25 西街道古墳
26 下田遺跡	27 高崎貝塚	28 愛生遺跡	29 愛生東遺跡	30 餅ケ崎遺跡
31 すすき山遺跡	32 五味ノ木遺跡	33 庚塚遺跡	34 南屋敷遺跡	35 殿山堀込遺跡
36 高津辺田遺跡	37 殿台貝塚	38 小満遺跡	39 堀込遺跡	40 東寺山貝塚
41 稲毛台遺跡	42 稲毛台東遺跡	43 海老遺跡	44 戸張作遺跡	45 東寺山石神遺跡

第１図　周辺の遺跡分布図（１）



1 園生新山遺跡　2 狐塚西遺跡　3 向原遺跡　4 園生貝塚　5 向原遺跡
6 本郷向遺跡　7 房地遺跡　8 犢橋貝塚　9 エゴダ遺跡　10 鳥込西貝塚
11 鳥込貝塚　12 鳥込東貝塚　13 鳥込東遺跡　14 定原遺跡　15 宮野木原遺跡
16 宮野木原第２遺跡　17 堀田遺跡　18 馬場遺跡　19 牛尾舛遺跡　20 谷津台貝塚
21 東ノ上貝塚　22 小中台Ａ遺跡　23 小中台Ｂ遺跡　24 城山遺跡　25 西街道古墳
26 下田遺跡　27 高崎貝塚　28 愛生遺跡　29 愛生東遺跡　30 餅ケ崎遺跡
31 すすき山遺跡　32 五味ノ木遺跡　33 庚塚遺跡　34 南屋敷遺跡　35 殿山堀込遺跡
36 高津辺田遺跡　37 殿台貝塚　38 小満遺跡　39 堀込遺跡　40 東寺山貝塚
41 稲毛台遺跡　42 稲毛台東遺跡　43 海老遺跡　44 戸張作遺跡　45 東寺山石神遺跡

第２図　周辺の遺跡分布図（２）



第３図　遺構配置図

賀蓮が出土している。

弥生時代では、宮野木支谷最奥の本郷向遺跡（６）で中期宮ノ台式期の住居跡１軒が検出されている。

古墳時代以降では、前方後円墳の西街道古墳（25）の他、牛尾舛遺跡（19）から円墳１基が検出されている。集落遺跡では、宮野木支谷の本郷向遺跡（６）から前期五領式期の住居跡６軒、宮野木原遺跡（15）から後期鬼高式期の住居跡４軒、牛尾舛遺跡（19）から前期五領式期～奈良時代真間式期の住居跡34軒、定原遺跡（14）から奈良・平安時代の住居跡61軒・掘立柱建物跡10棟が検出されており、園生支谷の最奥部の下田遺跡（26）からも、奈良・平安時代の住居跡83軒・掘立柱建物跡13棟が検出されている。

中世では、城山遺跡（24）が古代～中世の小中台城跡で、土塁・空堀・腰曲輪等の遺構が確認され、常滑壷が出土したが、土取工事のためほぼ煙滅、現状を留めていない。

東側の園生貝塚を載せる台地は、都川に合流する葭川と花園川の分水嶺をなす。葭川源流付近には加曽利Ｅ３～称名寺１式期の住居跡19軒を検出した愛生遺跡（28）や同時期の愛生東遺跡（29）、中流域には、早期の条痕文の住居跡３軒と加曽利Ｅ４～堀之内１式期の住居跡83軒と平安時代の住居跡35軒を検出した餅ヶ崎遺跡（30）や、加曽利Ｅ４式期の住居跡11軒を検出したすすき山遺跡（31）、加曽利Ｅ４～称名寺式期の住居跡33軒と古墳～平安時代の住居跡74軒を検出した海老遺跡（43）等の、園生新山遺跡とほぼ同じ縄文時代中期後半から後期初頭の遺跡が集中する他、殿台貝塚（37）等の後期の貝塚も存在する。特に殿台貝塚は葭川流域では、唯一オキアサリを主体としており、花園川流域から搬入された可能性が大きい。

２．調査の方法（第３図）

確認調査は２・５～８・12号棟部分に、２×５ｍの調査区を基本として約50ヶ所を設定した。その結果、２号棟東端部分では約20ｃｍのプライマリーな層が確認された他、12号棟周辺でもプライマリーな層が確認されたが、他の地点は既に大きく削平を受けていることが判明した。本調査では、表層の撹乱層を重機で除去後に清掃を行い、プライマリーな部分および検出された落ち込みの精査を行った後に、光波測定機で基準杭を設定し、図面化と写真撮影を行った。

Ⅲ．検出された遺構と遺物

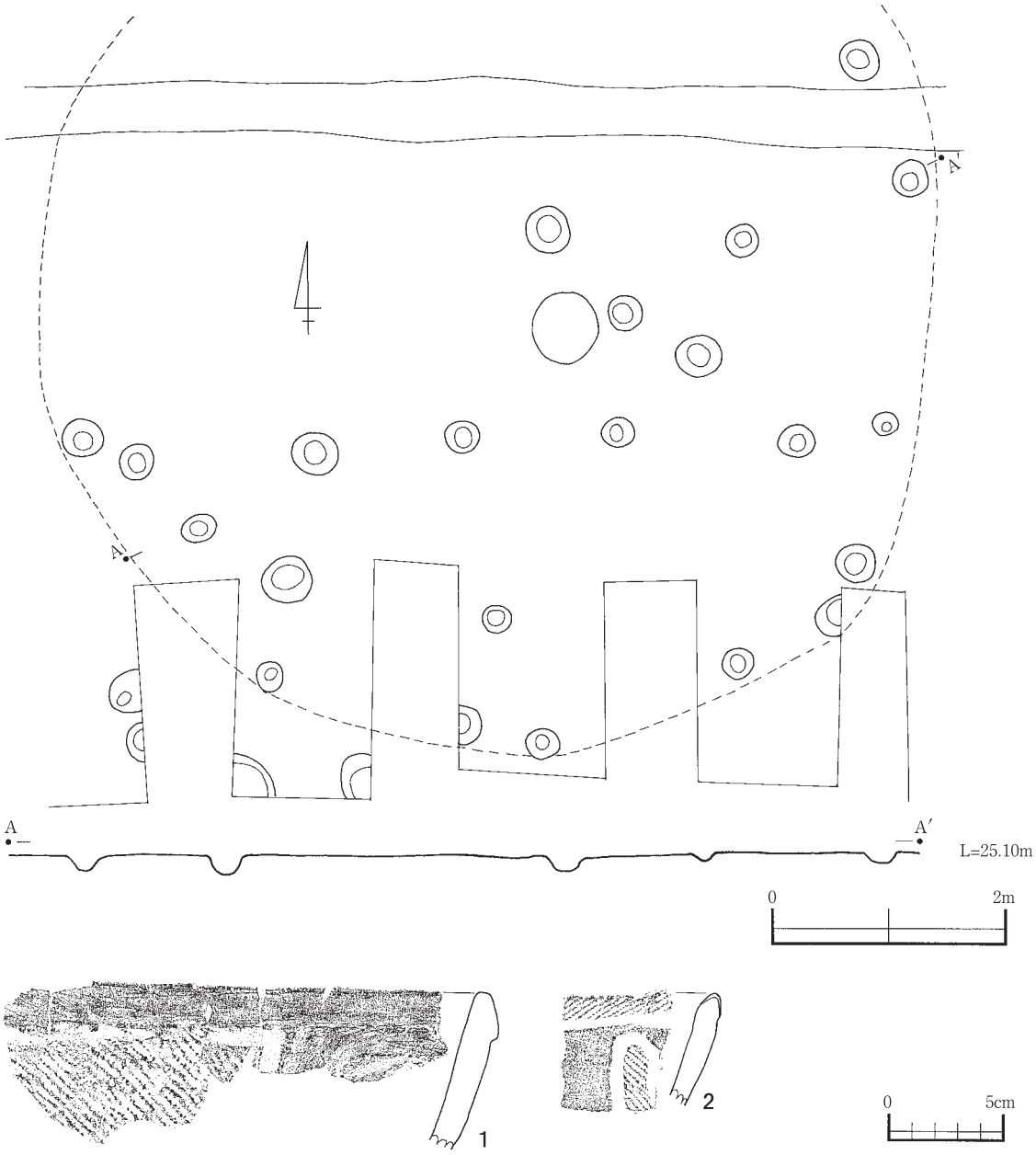
今回の本調査では、縄文時代中期の住居跡２軒と土壙17基が検出された。

１．竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡（第４図）

規模・形状：7.70×（5.30）ｍ　円形　北側は撹乱で壊され、床面まで削平を受けている。**重複遺構**：なし　**壁高**：不明　**主軸方向**：―　**床**：ソフトローム上面　削平　**周溝**：なし　**柱穴**：柱状の小ピット22本、このうち10本が壁柱穴と思われる。**遺物出土状況**：充填縄文を施した土器（１・２）が出土　**遺構の時期**：称名寺１式期

住居跡炉



第４図　第１号竪穴住居跡・出土遺物実測図

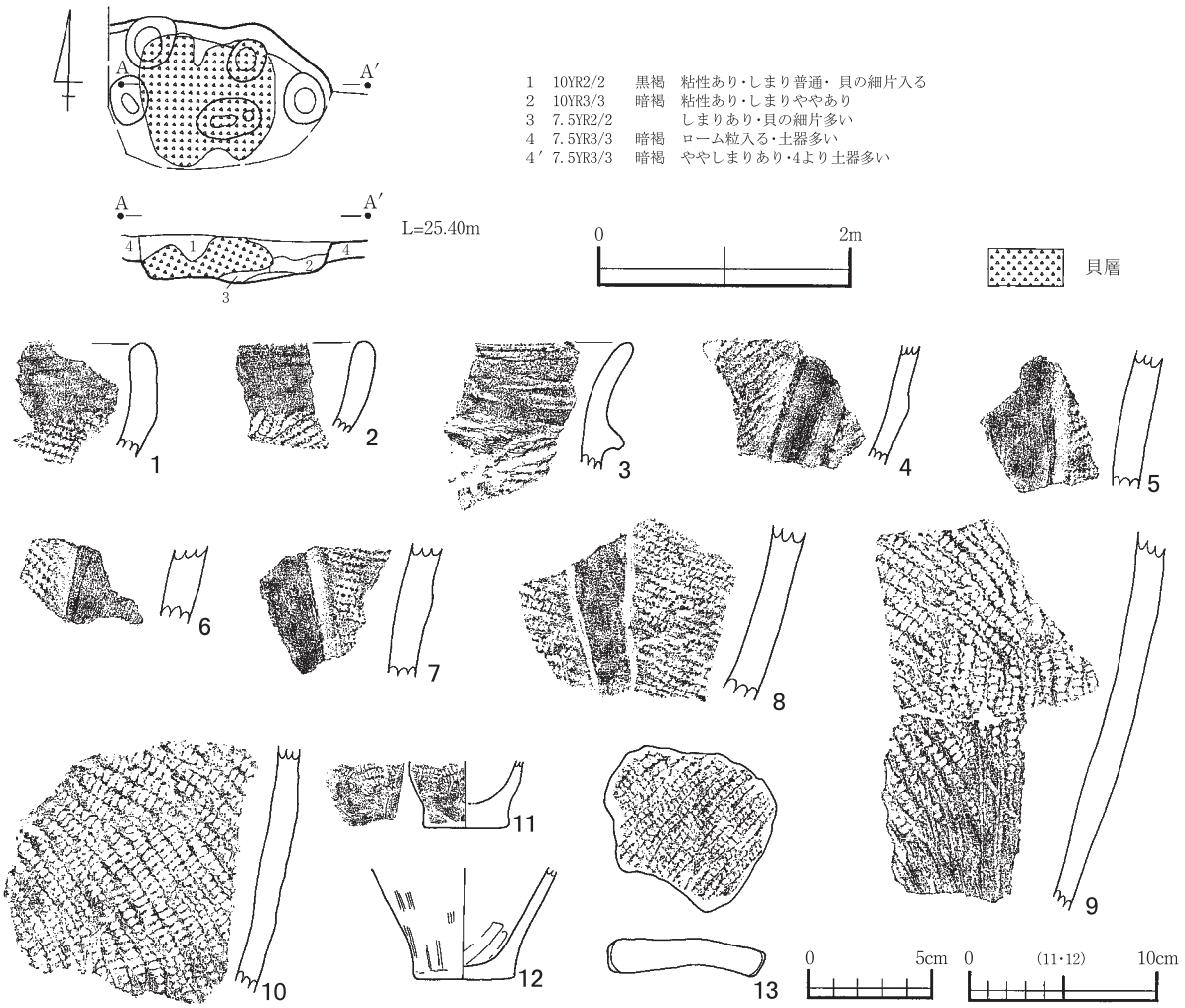
位置：竪穴住居跡中央に焼土が認められ、炉の残欠と思われる。**規模・形状**：0.60×0.60m－０m　円形　**遺物出土状況**：なし

第２号竪穴住居跡（第５図）

規模・形状：不明　竪穴住居跡の一部が検出されたのみ。**重複遺構**：なし　**壁高**：なし　**主軸方向**：―　**床**：ソフトローム上面　軟弱　**周溝**：なし　**柱穴**：ピットを５本検出　**遺物出土状況**：キサゴを主体とした貝ブロックを検出。微隆起線文を施した土器（１～６）と、沈線文を施した土器（７・８）が出土。13は円盤状土製品　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期

住居跡炉

位置：調査区域外



第５図　第２号竪穴住居跡・出土遺物実測図

２．土壙

第１号土壙　（第６・８図）

規模・形状：上面(長軸)1.60×(短軸)1.43m　下面(長軸)1.37×(短軸)1.28m　円形　**深さ**：1.16m

主軸方向：N－0°－E　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：キサゴを主体とした貝ブロックがあり、下から頭蓋骨が出土。土器は口縁部に微隆起線文を施し、胴部に充填縄文と微隆起線文を施す土器（１～５）と沈線を施す土器（６・７）が出土。　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期

第２号土壙（第６・８図）

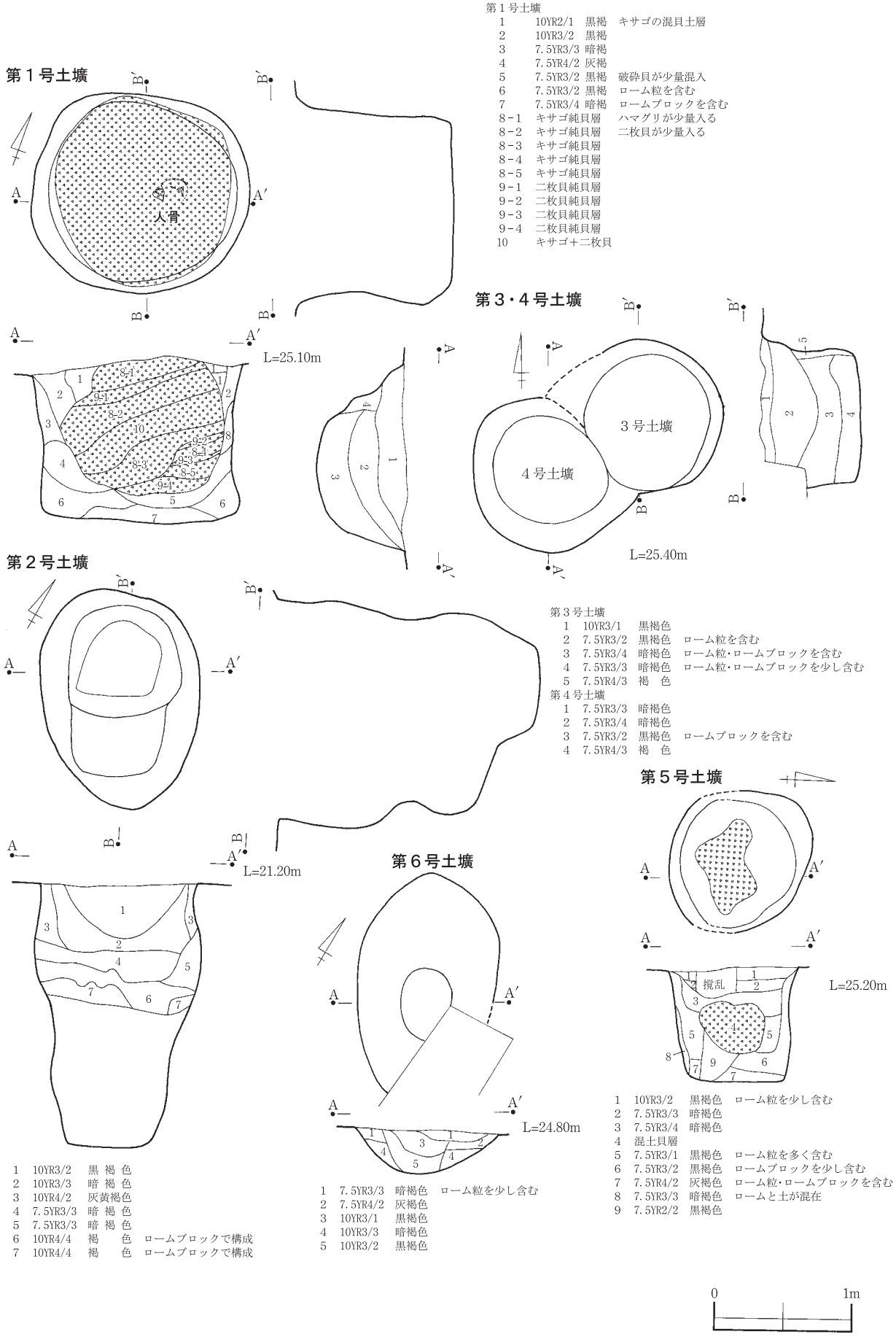
規模・形状：上面(長軸)1.53×(短軸)1.16m　下面(長軸)1.10×(短軸)0.80m　楕円形　**深さ**：1.90m

主軸方向：N－25°－E　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：なし　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期？

第３号土壙（第６・８図）

規模・形状：上面(長軸)1.14×(短軸)(0.96)m　下面(長軸)0.92×(短軸)0.88m　円形　**深さ**：0.70m

主軸方向：―　**重複遺構**：第４号土壙　**遺物出土状況**：口縁部に微隆起線文を施し、胴部に充填縄文と



第１号土壙

1	10YR2/1	黒褐	キサゴの混貝土層
2	10YR3/2	黒褐	
3	7.5YR3/3	暗褐	
4	7.5YR4/2	灰褐	
5	7.5YR3/2	黒褐	破砕貝が少量混入
6	7.5YR3/2	黒褐	ローム粒を含む
7	7.5YR3/4	暗褐	ロームブロックを含む
8-1	キサゴ純貝層		ハマグリが少量入る
8-2	キサゴ純貝層		二枚貝が少量入る
8-3	キサゴ純貝層		
8-4	キサゴ純貝層		
8-5	キサゴ純貝層		
9-1	二枚貝純貝層		
9-2	二枚貝純貝層		
9-3	二枚貝純貝層		
9-4	二枚貝純貝層		
10	キサゴ＋二枚貝		

第３号土壙

1	10YR3/1	黒褐色	
2	7.5YR3/2	黒褐色	ローム粒を含む
3	7.5YR3/4	暗褐色	ローム粒・ロームブロックを含む
4	7.5YR3/3	暗褐色	ローム粒・ロームブロックを少し含む
5	7.5YR4/3	褐　色	

第４号土壙

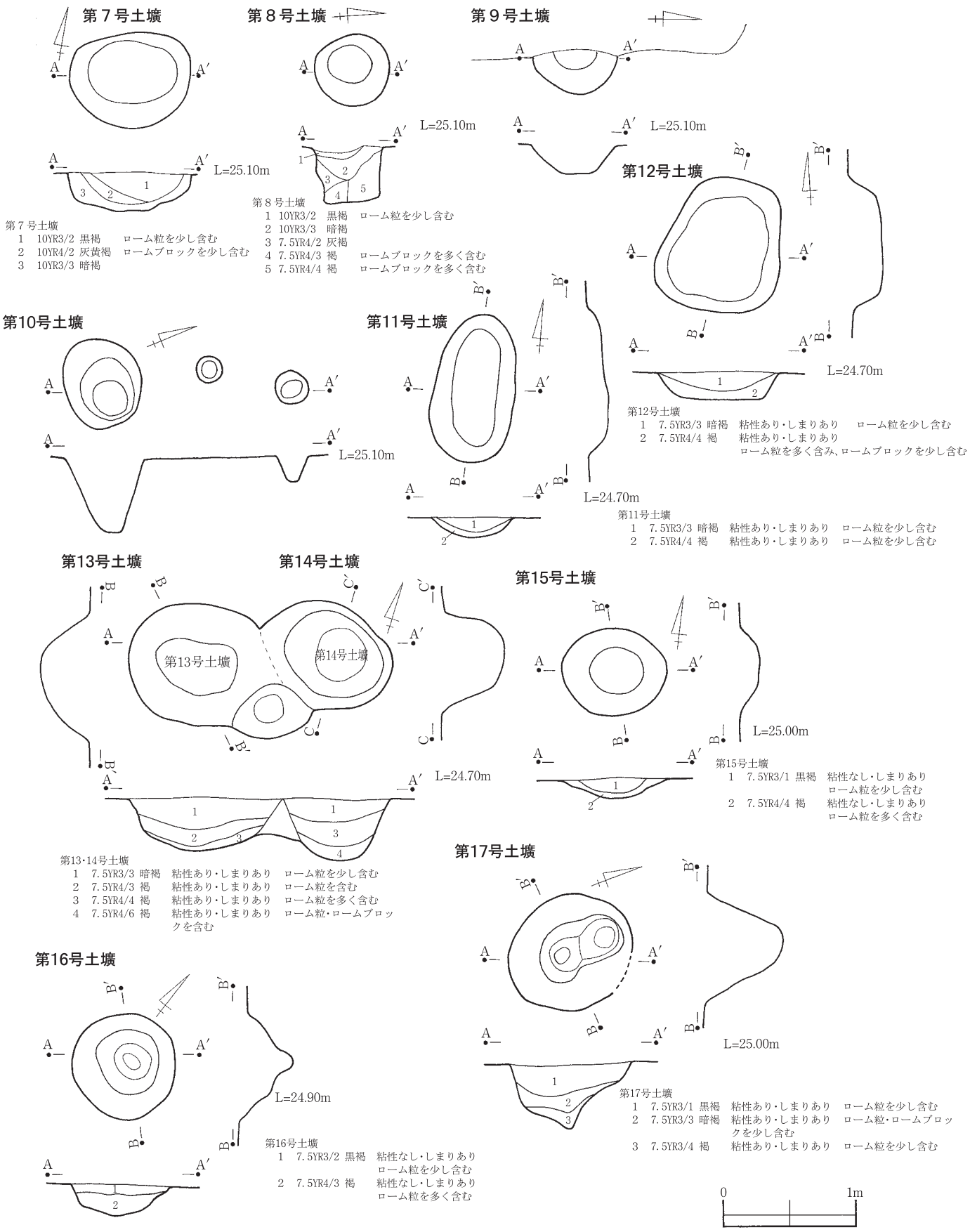
1	7.5YR3/3	暗褐色	
2	7.5YR3/4	暗褐色	
3	7.5YR3/2	黒褐色	ロームブロックを含む
4	7.5YR4/3	褐　色	

1	10YR3/2	黒 褐 色	
2	10YR3/3	暗 褐 色	
3	10YR4/2	灰黄褐色	
4	7.5YR3/3	暗 褐 色	
5	7.5YR3/3	暗 褐 色	
6	10YR4/4	褐　　色	ロームブロックで構成
7	10YR4/4	褐　　色	ロームブロックで構成

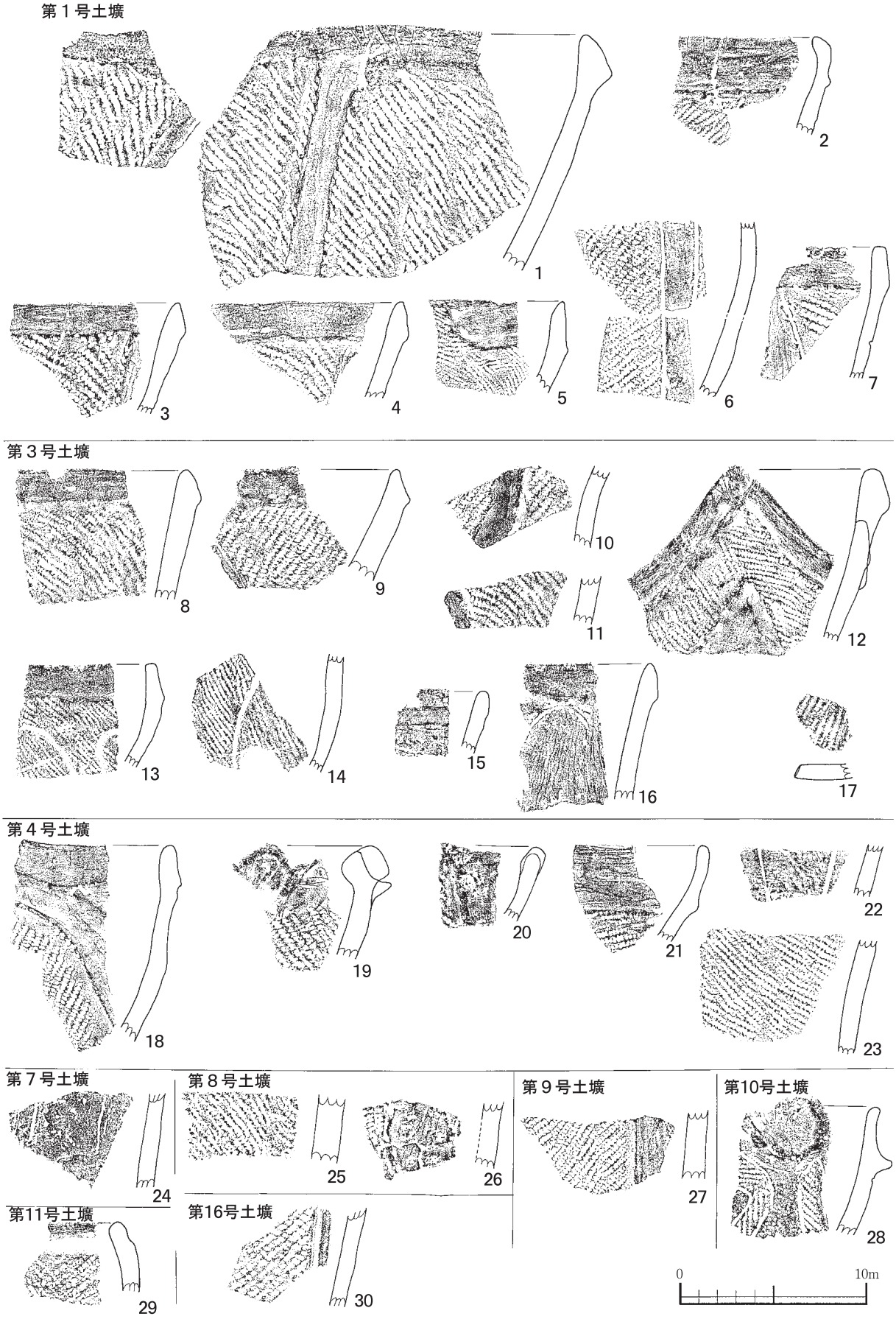
1	7.5YR3/3	暗褐色	ローム粒を少し含む
2	7.5YR4/2	灰褐色	
3	10YR3/1	黒褐色	
4	10YR3/3	暗褐色	
5	10YR3/2	黒褐色	

1	10YR3/2	黒褐色	ローム粒を少し含む
2	7.5YR3/3	暗褐色	
3	7.5YR3/4	暗褐色	
4	混土貝層		
5	7.5YR3/1	黒褐色	ローム粒を多く含む
6	7.5YR3/2	黒褐色	ロームブロックを少し含む
7	7.5YR4/2	灰褐色	ローム粒・ロームブロックを含む
8	7.5YR3/3	暗褐色	ロームと土が混在
9	7.5YR2/2	黒褐色	

第６図　第１～６号土壙実測図



第７図　第７～17号土壌実測図



第８図　第１・３・４・７～11・16土壙出土遺物実測図

微隆起線文を施す土器（８～12）と、沈線を施す土器（13・14）、縄文を施文せず沈線のみの土器（16）と土製円板（18）が出土。　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期

第４号土壙　（第６・８図）

規模・形状：上面(長軸)1.16×(短軸)(0.95)ｍ　下面(長軸)0.83×(短軸)0.76ｍ　円形　**深さ**：0.65ｍ

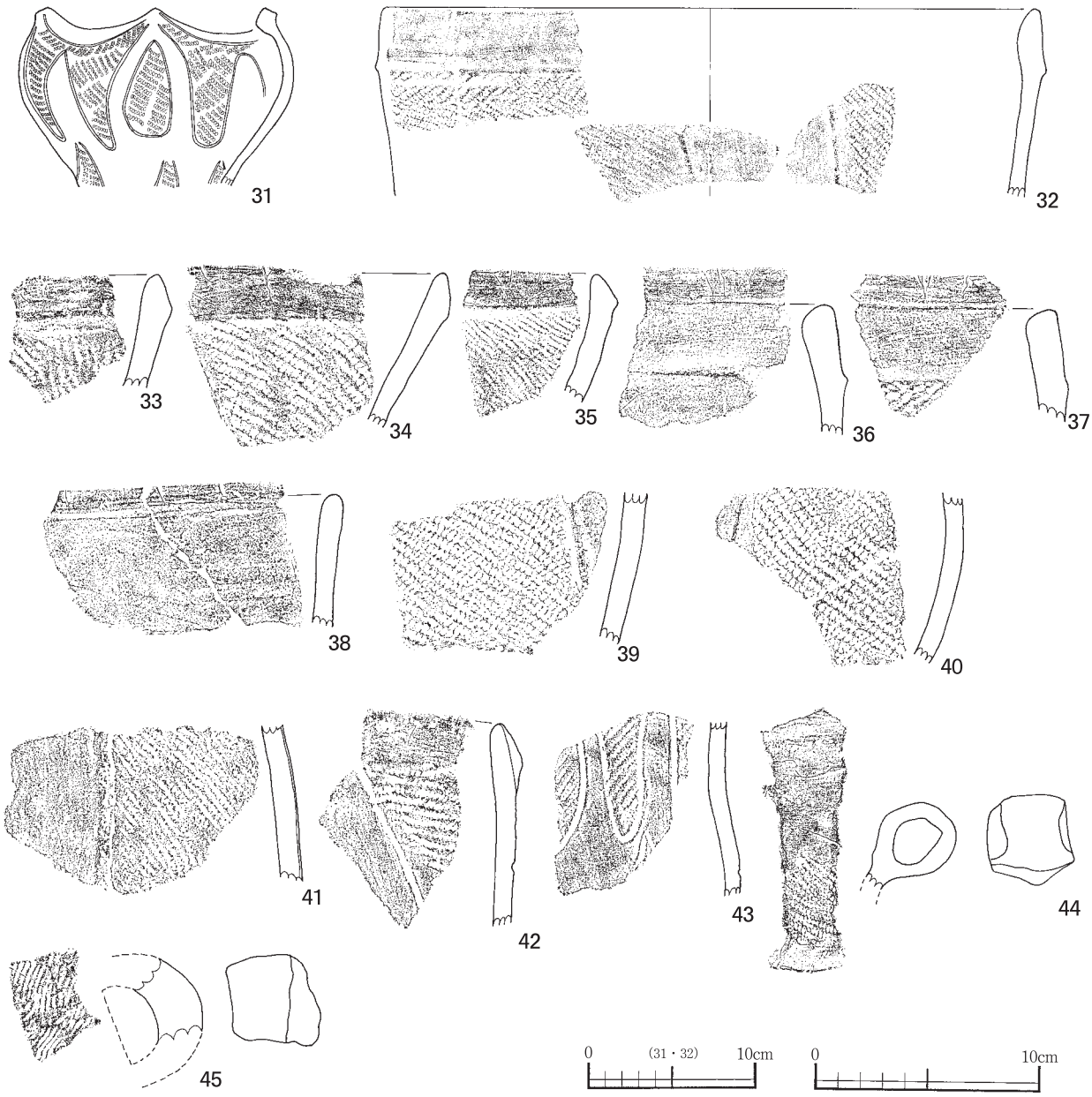
主軸方向：－　**重複遺構**：第３号土壙　**遺物出土状況**：口縁部に微隆起線文を施し、胴部に充填縄文と微隆起線文を施す土器（18～21）と、沈線を施す土器（22）が出土　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期

第５号土壙　（第６図）

規模・形状：上面(長軸)1.14×(短軸)1.03ｍ　下面(長軸)0.84×(短軸)0.84ｍ　円形　**深さ**：0.83ｍ

主軸方向：Ｎ－35°－Ｗ　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：なし　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期？

第６号土壙（第６・９図）



第９図　第６号土壙出土遺物実測図

規模・形状：上面(長軸) (1.60)×(短軸)0.96m　下面(長軸) (0.50)×(短軸)0.38m　楕円形　**深さ**：0.34m　**主軸方向**：N－31°－W　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：微隆起線文を施す土器(32～41)と、充填縄文の土器(31・42・43)、把手(44・45)が出土　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期

第７号土壙（第７・８図）

規模・形状：上面(長軸)0.91×(短軸)0.72m　下面(長軸)0.56×(短軸)0.47m　楕円形　**深さ**：0.30m　**主軸方向**：N－80°－E　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：沈線を施した土器(24)が出土　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期

第８号土壙（第７・８図）

規模・形状：上面(長軸)0.57×(短軸)0.53m　下面(長軸)0.32×(短軸)0.30m　円形　深さ：0.42m　**主軸方向**：―　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：縄文と微隆起線文の土器（26）が出土　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期

第９号土壙（第７・８図）

規模・形状：上面(長軸)0.63×(短軸)(0.34)m　下面(長軸)0.30×(短軸)(0.16)m　円形　**深さ**：0.22m　**主軸方向**：―　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：沈線文の土器(27)が出土　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期

第10号土壙（第７・８図）

規模・形状：上面(長軸)0.69×(短軸)0.56m　下面(長軸)0.29×(短軸)0.25m　円形　**深さ**：0.55m　**主軸方向**：―　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：微隆起線文と充填縄文を施した土器(28)が出土　**遺構の時期**：称名寺１式期

第11号土壙（第７・８図）

規模・形状：上面(長軸)1.11×(短軸)0.61m　下面(長軸)0.86×(短軸)0.34m　楕円形　**深さ**：0.16m　**主軸方向**：N－３°－E　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：加曽利Ｅ３式(29)が出土　**遺構の時期**：加曽利Ｅ３式期

第12号土壙（第７図）

規模・形状：上面(長軸)1.02×(短軸)0.87m　下面(長軸)0.80×(短軸)0.66m　楕円形　**深さ**：0.23m　**主軸方向**：N－18°－E　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：なし　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期？

第13号土壙（第７図）

規模・形状：上面(長軸)1.08×(短軸)(0.91)m　下面(長軸)0.57×(短軸)0.39m　円形　**深さ**：0.40m　**主軸方向**：―　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：なし　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期？

第14号土壙（第７図）

規模・形状：上面(長軸)0.91×(短軸)(0.85)m　下面(長軸)0.39×(短軸)0.37m　円形　**深さ**：0.45m　**主軸方向**：―　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：なし　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期？

第15号土壙（第７図）

規模・形状：上面(長軸)0.79×(短軸)0.64m　下面(長軸)0.40×(短軸)0.36m　円形　**深さ**：0.16m　**主軸方向**：―　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：なし　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期？

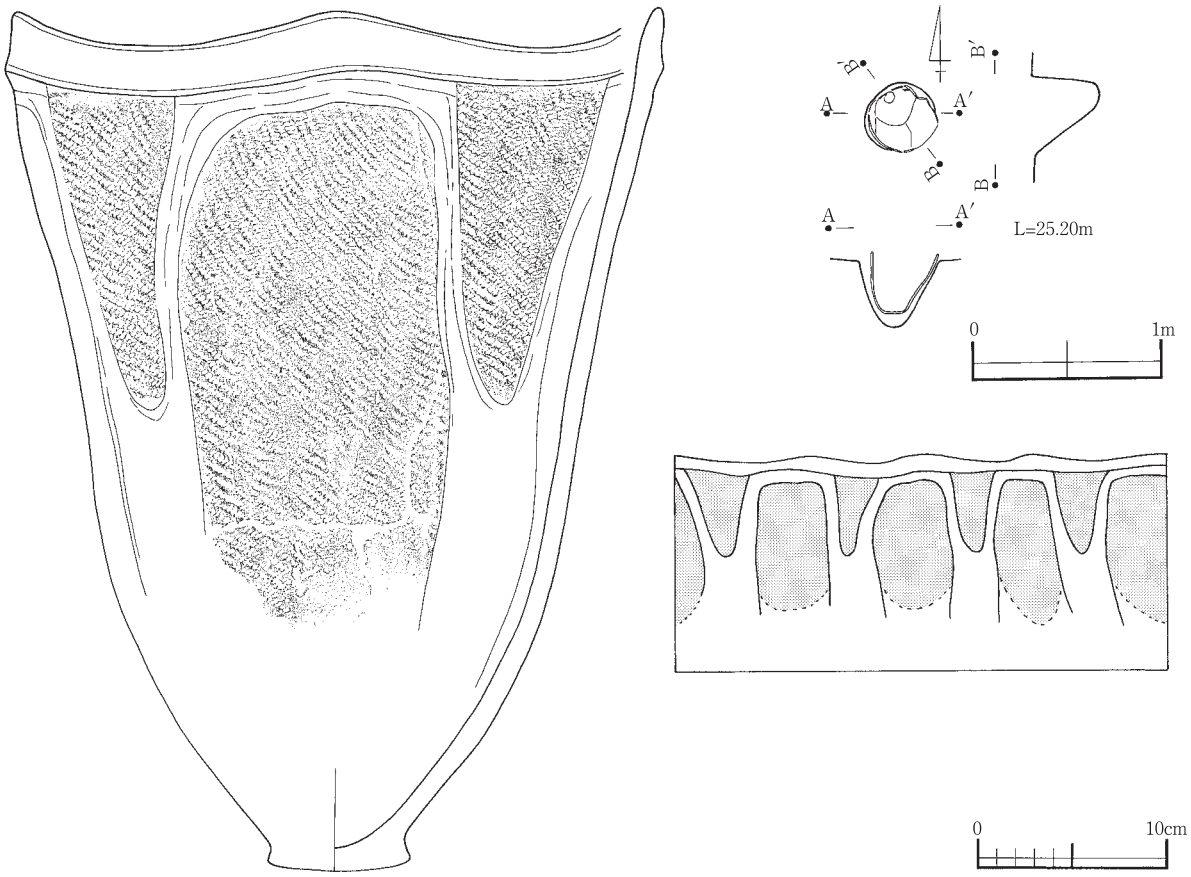
第16号土壙（第７・８図）

規模・形状：上面(長軸)0.78×(短軸)0.77m　下面(長軸)0.15×(短軸)0.10m　円形　**深さ**：0.37m
主軸方向：―　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：沈線文の土器（30）が出土。**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期？

第17号土壙（第７図）
規模・形状：上面(長軸)0.96×(短軸)0.85m　下面(長軸)0.13×(短軸)0.11m　円形　**深さ**：0.60m
主軸方向：―　**重複遺**構：なし　**遺物出土状況**：なし　**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期？

３．屋外埋設土器（第10図）

規模・形状：上面(長軸)0.38×(短軸)0.36m　下面(長軸)0.18×(短軸)0.16m　円形　**深さ**：0.35m
主軸方向：―　**重複遺構**：なし　**遺物出土状況**：微隆起線文土器をほぼ直立に埋設。**遺構の時期**：加曽利Ｅ４式期



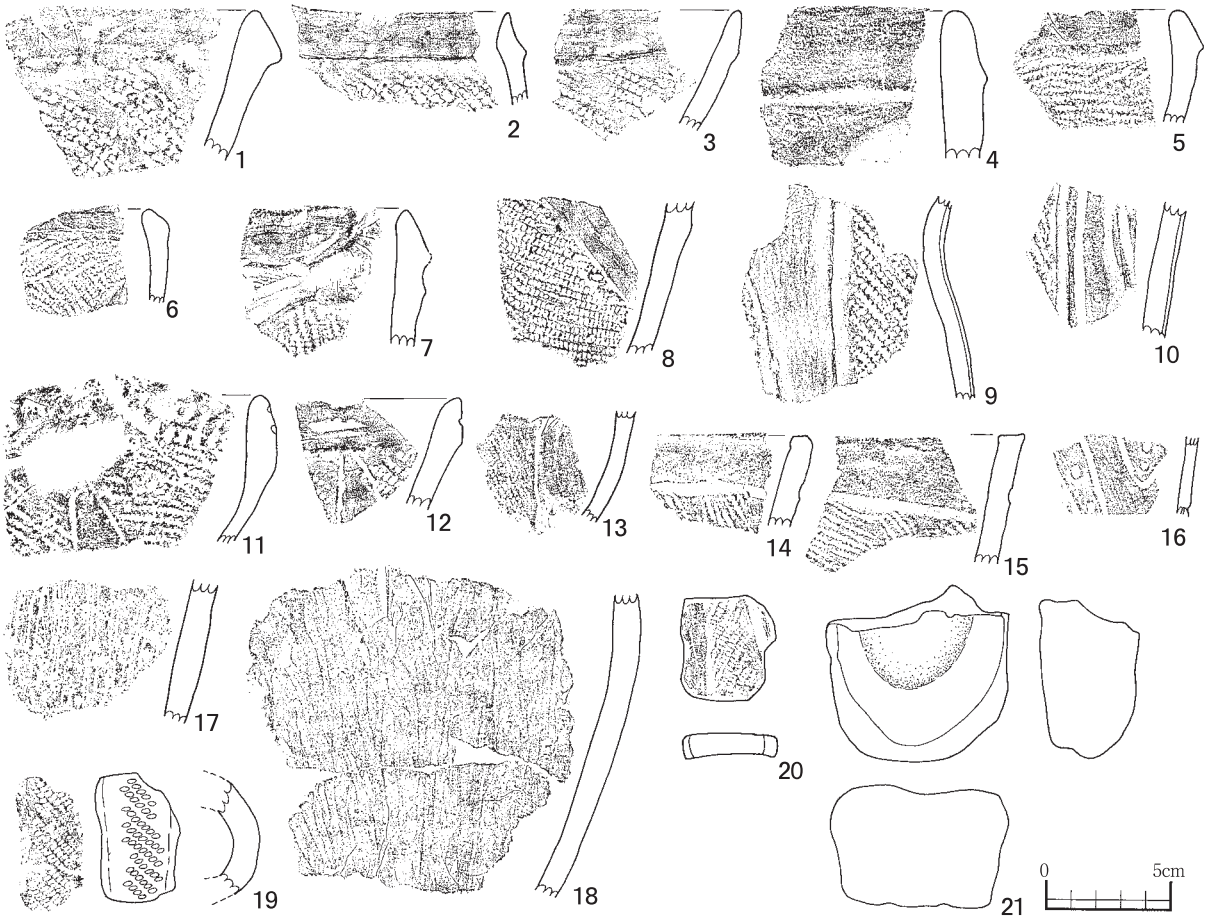
第10図　屋外埋設土器実測図

４．調査区出土遺物

Ａ．縄文土器（11図）

団地が建っていたために大きく削平を受けており、調査区から出土した土器は殆どない。出土した土器は縄文時代中期最終末の加曽利Ｅ４式～後期初頭の称名寺２式土器のみである。

第１群土器　波状口縁を呈し、口縁部無文帯下に微隆起線文を有する加曽利Ｅ４式土器（１～13）



第11図　調査区出土遺物実測図

第１類土器　胴部に充填縄文と微隆起線文を施す土器（７～10）

第２類土器　胴部に細い沈線を施す土器（12・13）

第３類土器　橋状把手（19）

第２群土器　波状口縁を呈し、口縁部直下に刺突文を有し、胴部に細い沈線を施す加曽利Ｅ４式土器(11)

第３群土器　太い沈線区画内に縄文を充填する称名寺１式土器（14・15）

第４群土器　太い沈線区画内に列点を充填する称名寺２式土器（16）

第５群土器　その他の土器。櫛目文を施す土器（17）と、擦痕を有する胴部破片（18）が出土。

Ｂ．土製品・石製品（11図）

土錘１点と磨石１点が出土。土錘（20）は3.8×4.0㎝、重さ20.2ｇで完形。磨石（21）は（7.2）×6.0㎝、で重さ301.0ｇで１/２。

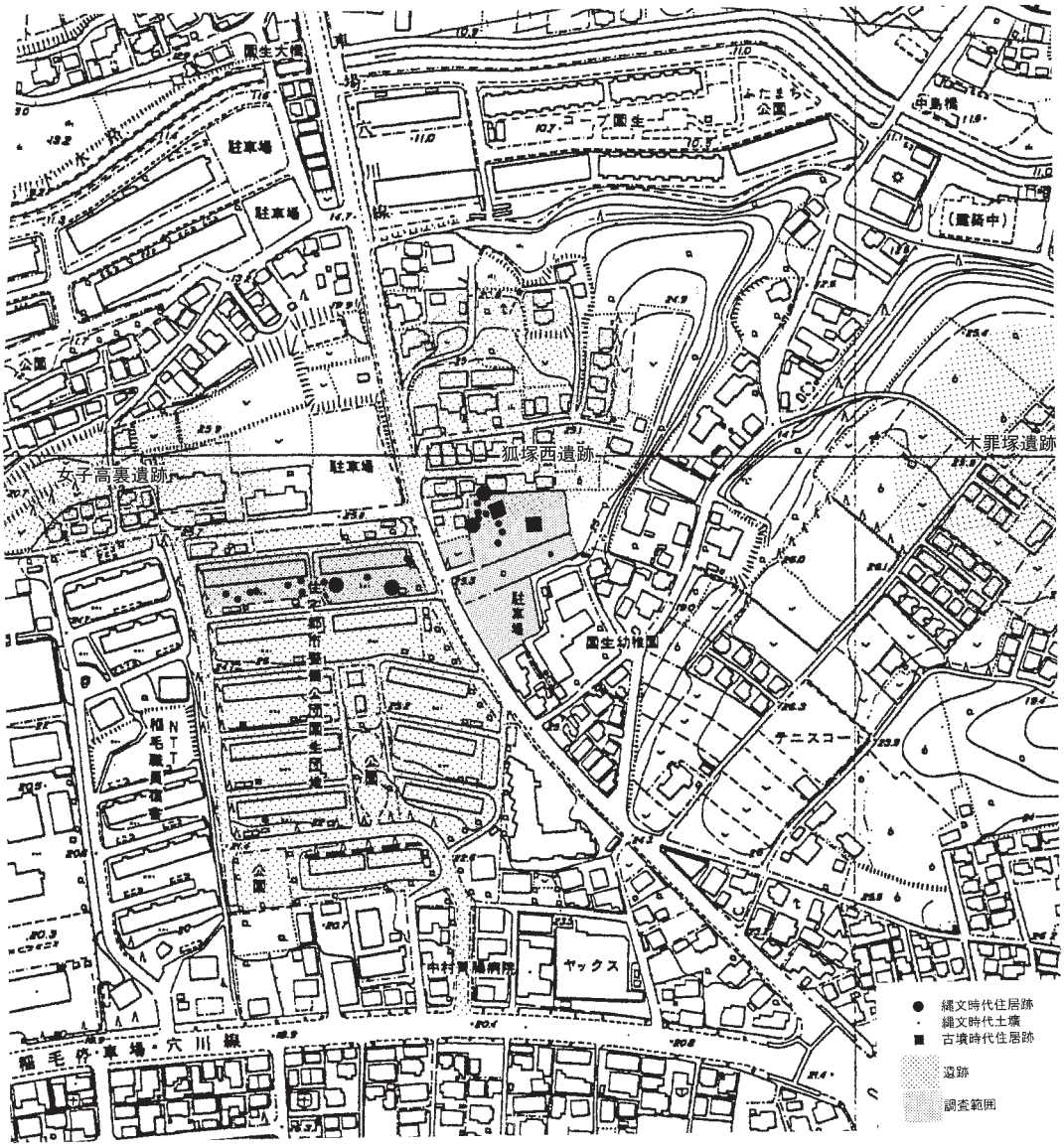
Ⅳ．ま と め

１．園生新山遺跡について

２回の調査で竪穴住居跡２軒・土壙17基が検出された。第１号竪穴住居跡は称名寺１式期、第２号

竪穴住居跡は加曽利Ｅ４式期と捉えられる。道路を挟んで東側の狐塚西遺跡では平成２年の調査により、加曽利Ｅ４式期の竪穴住居跡２軒と加曽利Ｅ４～称名寺２式期の土壙８基が検出されている。園生新山遺跡と狐塚西遺跡は同じ台地上に展開しており、同一遺跡と捉えられる。確認調査では団地南西部に２号土壙が検出されており、100mを越える範囲内で遺構が展開している。ほぼ同じ時期の集落を全面調査した餅ヶ崎遺跡では、約250m範囲で加曽利Ｅ４～称名寺式期の住居が展開している。

園生新山遺跡と狐塚西遺跡の出土土器は、加曽利Ｅ３～称名寺２式土器までで、堀之内式以降の土器は出土していない。これは、両遺跡の東500mに位置し、堀之内式期以降に環状貝塚を形成する園生貝塚に取り込まれた結果と思われる。園生支谷を隔てた北側の小中台台地では、宮野木原第２・定原遺跡（加曽利Ｅ２式期）→牛尾舛・小中台Ａ遺跡（加曽利Ｅ３式期古段階）→馬場遺跡・（東の上貝塚）（加曽利Ｅ３式期新段階）→小中台Ａ遺跡平成17年度調査地点（加曽利Ｅ４式期）→東の上・高崎貝塚（称名寺～



第12図　園生新山・狐塚西遺跡周辺地形図

加曽利Ｂ式期）と集落が変遷する過程が追え、加曽利Ｂ式期以降は園生貝塚に吸収される動きが窺える。東側の葭川流域でも、廿五里・廿五里北貝塚（阿玉台～加曽利Ｅ１式期）→東寺山南・東寺山貝塚（加曽利Ｅ１～Ｅ２式期）→愛生・餅ヶ崎・すすき山・海老遺跡（加曽利Ｅ３～称名寺２式期）→殿台・殿台南貝塚（堀之内式期以降の環状貝塚）の変遷が辿れる。千葉市域を中心とした大型環状貝塚は中期後半に大きな断絶が認められる。その時期は、加曽利Ｅ２式期後半の連弧文土器の終末期にあたり、それ以降は短期間の集落が多く認められ、後期の堀之内１式期以降に形成される大型環状貝塚に吸収される姿が当地域でも如実に認められる。この時期は貯蔵形態の変遷と連動して大型環状貝塚の解体・拡散が顕著な半面、都川中・上流域への遺跡の拡大等、従来遺跡が形成されなかった地域への進出も認められる。園生新山遺跡が位置する周辺も、このような動きの中で捉え直す必要がある。

第１表　遺構計測表

住居	規模					形状	周溝	方位	時期	調査時NO	調査年度	備考	住居	規模				形状	周溝	方位	時期	調査時NO	調査年度	備考
	東壁	西壁	南壁	北壁	壁高									東壁	西壁	南壁	北壁							
1号住居									称名寺I式	A-001	2001		2号住居					0.3	円形	なし		加曽利EIV	C-005	2001	貝層
土壙	上場		下場			形状	重複遺構	方位	時期	調査時NO	調査年度	備考	土壙	上場		下場			形状	重複遺構	方位	時期	調査時NO	調査年度	備考
	長径×短径		長径×短径											長径×短径		長径×短径									
1号土壙	1.60×1.43		1.37×1.28		1.16	円形			加曽利E4	C-001	2003	貝層の下は人骨	10号土壙	0.69×0.56		0.29×0.25		0.55	円形			称名寺1	C-011	2003	
2号土壙	1.53×1.16		1.10×0.80		1.90	楕円形		N-25°-E		C-002	2003		11号土壙	1.11×0.61		0.86×0.34		0.16	楕円形		N-3°-E	加曽利E3	C-001	2006	
3号土壙	1.14×(0.96)		0.92×0.88		0.70	円形	C-004		加曽利E4	C-003	2003		12号土壙	1.02×0.87		0.80×0.66		0.23	楕円形		N-18°-E		C-002	2006	
4号土壙	1.16×(0.95)		0.83×0.76		0.65	円形	C-003		加曽利E4	C-004	2003		13号土壙	1.08×(0.91)		0.57×0.39		0.40	円形				C-003	2006	
5号土壙	1.14×1.03		0.84×0.84		0.83	円形		N-35°-W		C-006	2003	貝層有	14号土壙	0.91×(0.85)		0.39×0.37		0.45	円形				C-007	2006	
6号土壙	(1.60)×0.96		(0.50)×0.38		0.34	楕円形	区域外	N-31°-W		C-007	2003		15号土壙	0.79×0.64		0.40×0.36		0.16	円形				C-004	2006	
7号土壙	0.91×0.72		0.56×0.47		0.30	楕円形		N-80°-E	加曽利E4	C-008	2003		16号土壙	0.78×0.77		0.15×0.10		0.37	円形				C-005	2006	
8号土壙	0.57×0.53		0.32×0.30		0.42	円形			加曽利E4	C-009	2003		17号土壙	0.96×0.85		0.13×0.11		0.60	円形				C-006	2006	
9号土壙	0.63×(0.34)		0.30×(0.16)		0.22	(円形)	区域外		加曽利E4	C-010	2003		屋外埋設土器	0.38×(0.36)		0.18×0.16		0.35	円形					2003	

２．第１号土壙の貝組製

第１号土壙からは、キサゴ純貝層（８層）、二枚貝純貝層（９層）、キサゴと二枚貝混成貝層（10層）の３種類、11枚の貝層が検出された（断面には出ていないが９－４層の奥に、８－６層がある）。貝層は半裁し断面図作成後、層毎に取り上げられた。今回はこのうち８－３層と９－４層の２層の分析を行った。水洗選別作業は４㎜・２㎜・１㎜メッシュ寸法の試験用フルイで行った。集計は巻貝類では軸部を完存するもの、二枚貝類では殻頂部の残存するものを対象とした。二枚貝類は左右殻の出土数の多い方をもって最小個体数とした。

復足網（巻貝）８種、二枚貝網10種が同定され、イボキサゴが圧倒的な尊有種である点は、東京湾東岸地域の貝塚の特徴を有している。これに次ぐのがオキアサリで、マガキ・ハマグリの順になる。また８－３層と９－４層では、貝組成の変化は認められないが、イボキサゴが８－３層では97.1％を占めているのに対して、９－４層では84.2％と減少しているのに対して、オキアサリは８－３層が1.3％を占めているのに対して、二枚貝純貝層の９－４層では14.7％と大幅に増加しているが、ハマグリは減少している。この他にカシパンウニ、カニの挟の破片、タイの歯が確認された。

水系を同じくする小中台（Ａ）遺跡では、昭和60年度調査の第１号・第２号竪穴住居跡から検出された貝ブロックの分析が行われている（註１）。いずれも加曽利Ｅ３式期と思われる時期で、個体数では両竪穴住居跡とも、アサリ・イボキサゴ・オキアサリ・ハマグリ・シオフキの順を示しており、昭和61年

度調査でも同様の傾向が認められる。これに対して、葭川流域の愛生貝塚のではイボキサゴが主体を占め、ハマグリ・アサリがこれに次ぐ（註２）。奥東京湾東岸の貝塚でオキアサリが主体をなすのは、稲毛浜以北の貝塚であり、葭川・都川流域ではイボキサゴとハマグリが主体を占め、オキアサリが主体を占めるのは殿台貝塚のみである（註３）。これは園生新山遺跡が位置する花園川流域の園生支谷から搬入された可能性が大きい。

註１．小宮猛　1987「一括サンプル内出土の自然遺物」『千葉市小中台遺跡』（財）千葉県文化財センター

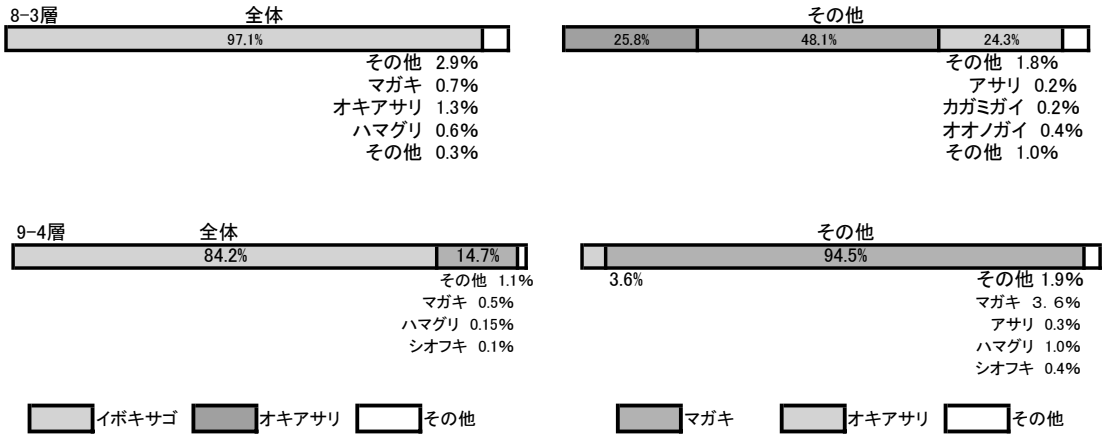
小宮猛　1989「貝層および住居跡の灰サンプル出土の脊椎動物依存体」『千葉市小中台（２）遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡』（財）千葉県文化財センター

２．綿貫敦子　2000「貝類の同定」『千葉市愛生遺跡』（財）千葉市文化財調査協会

３．岡田茂弘・宇田川浩一　2000「園生貝塚」『千葉県の歴史　資料編　考古１（旧石器・縄文時代）』千葉県

第２表　第１号土壙出土貝集計表

貝　種		８-３層	９-４層	合計	貝　種			８-３層	９-４層	合計
		数	数					数	数	
腹足網	イボキサゴ	14,600	6,145	20,745	二枚貝網	マガキ	L	106	38	144
	ウミニナ	3		3			R	93	41	134
	ツメタガイ		1	1		アサリ	L	1	1	2
	ウニ	1	5	6			R	1	4	5
	ホソウミニナ					オキシジミ	L		1	1
	マイマイ		8	8			R		1	1
	不明	1		1		カガミガイ	L	1		1
甲殻網	カシパンウニ						R	0		
	カニ類		挟破片	1		オキアサリ	L	190	1070	1260
軟骨魚網	エイ類のシバン	1					R	200	1029	1229
硬骨魚網	タイの歯	8		8		ハマグリ	L	95	11	106
							R	100	5	105
						シオフキ	L	4	4	8
							R		5	5
						オオノガイ	L	2		2
							R	1		1



第13図　第１号土壙出土貝類組成グラフ

調査区全景

調査区近景

確認調査状況

本調査状況

第２号住居跡貝層検出状況

第２号住居跡

第１号土壙

第２号土壙

第３号土壙

第３・４号土壙

第５号土壙

第５号土壙貝層検出状況

第５号土壙断面

第７号土壙

第８号土壙

第９号土壙

第10号土壙

第11号土壙

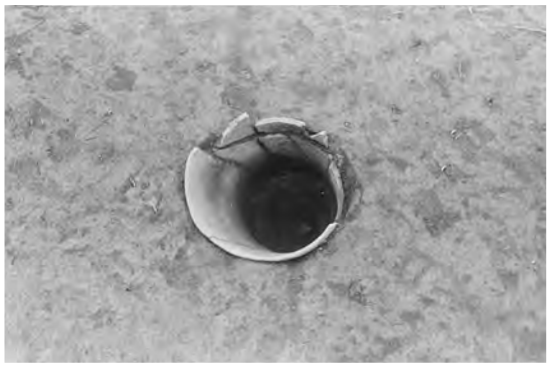
第12号土壙

第13･14号土壙

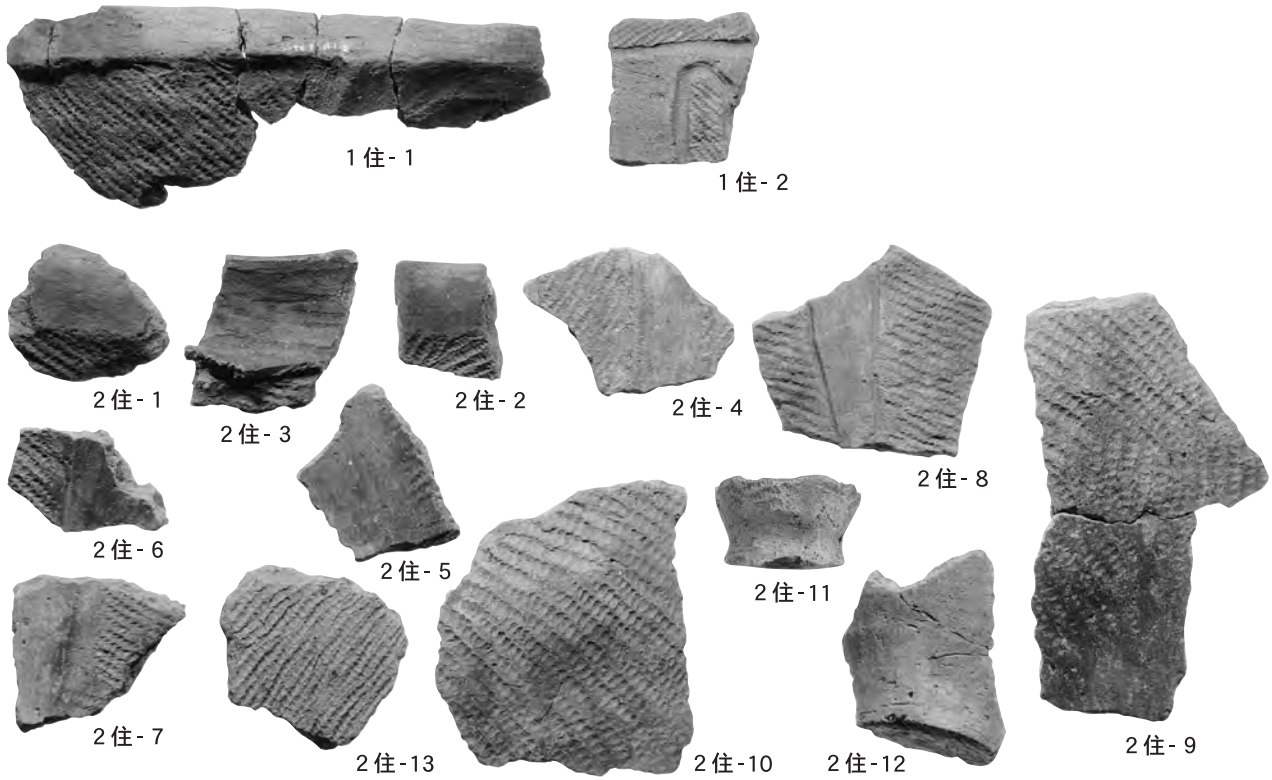
第15号土壙

第16号土壙

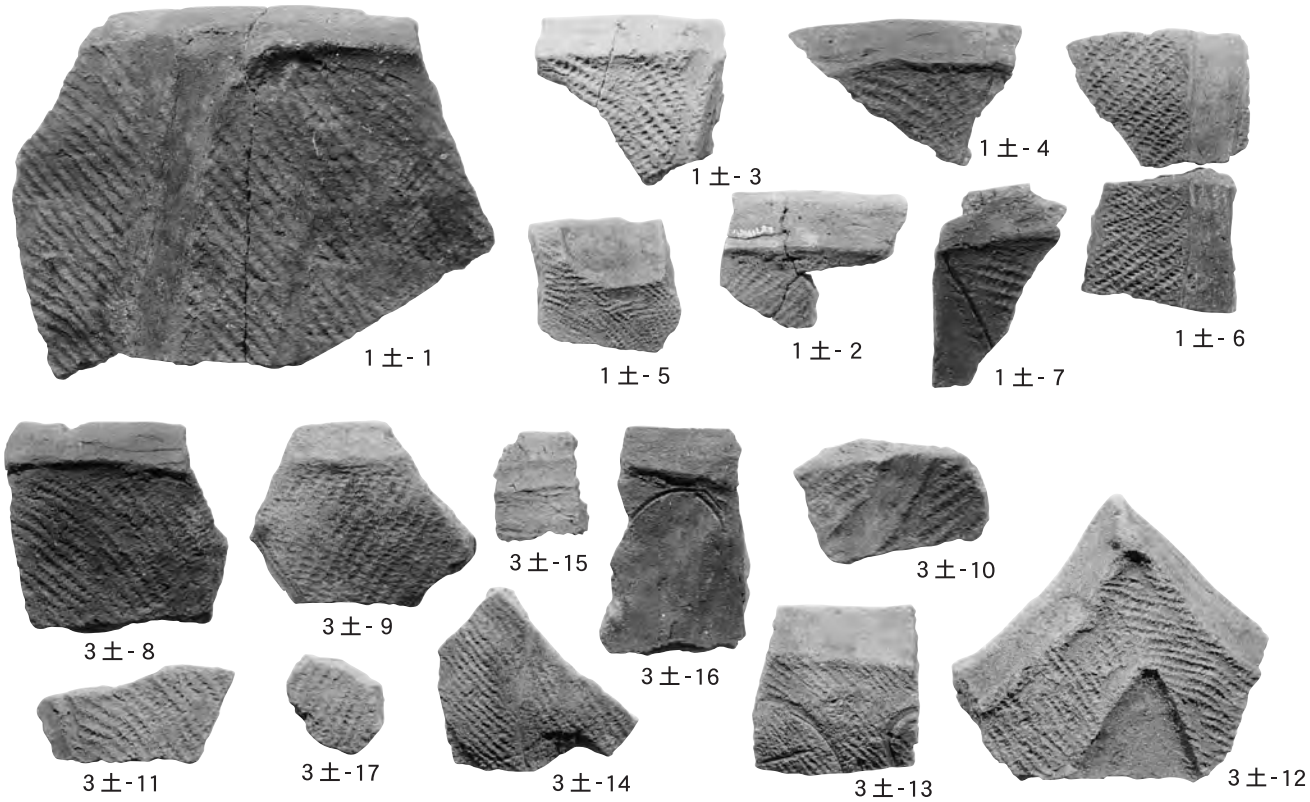
第17号土壙



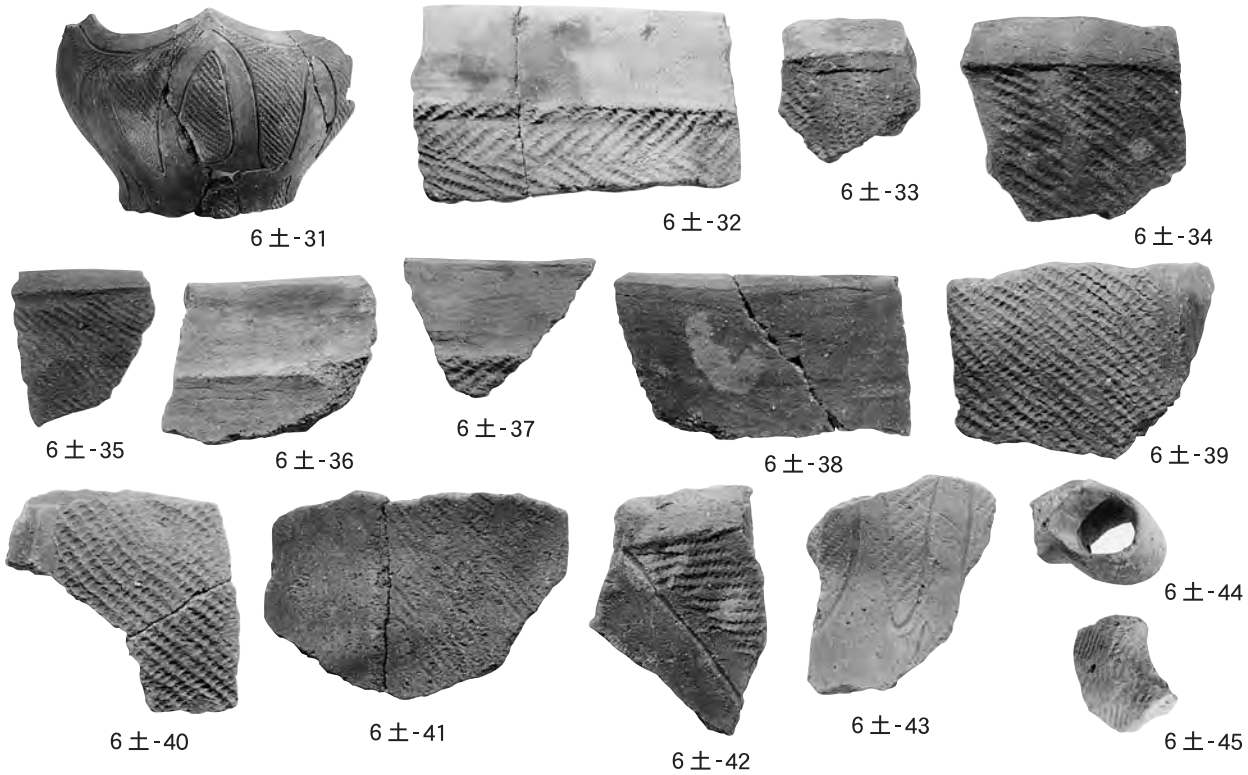
屋外埋設土器出土状況



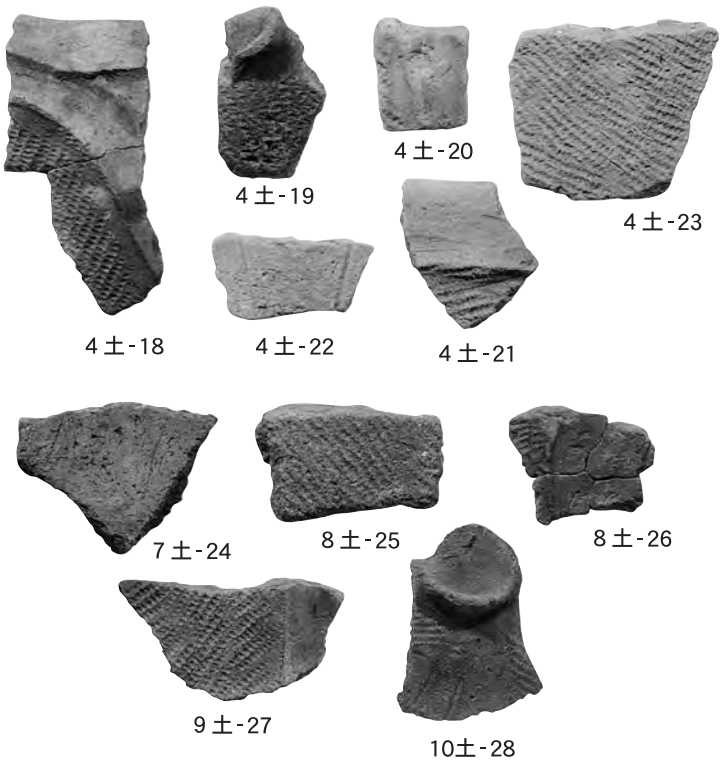
第１・２号竪穴住居跡出土遺物



第１・３号土壙出土遺物

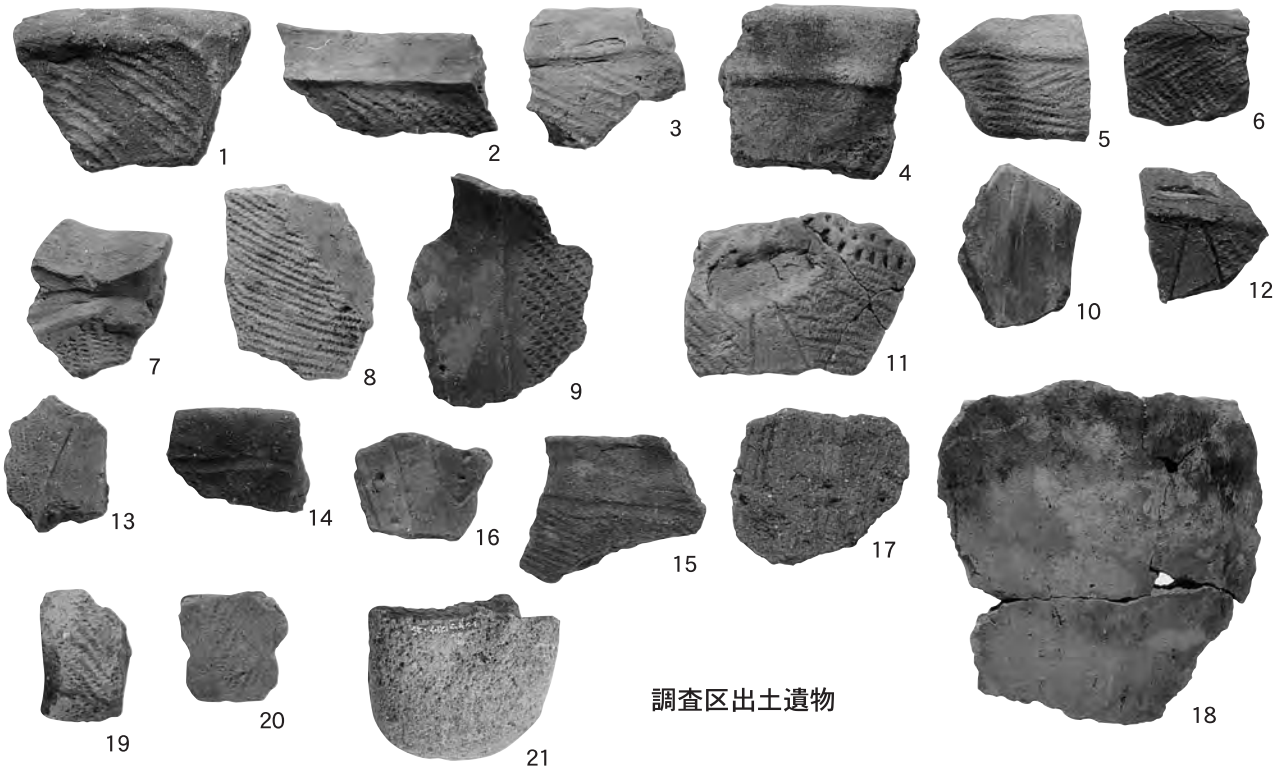


第６号土壙出土遺物

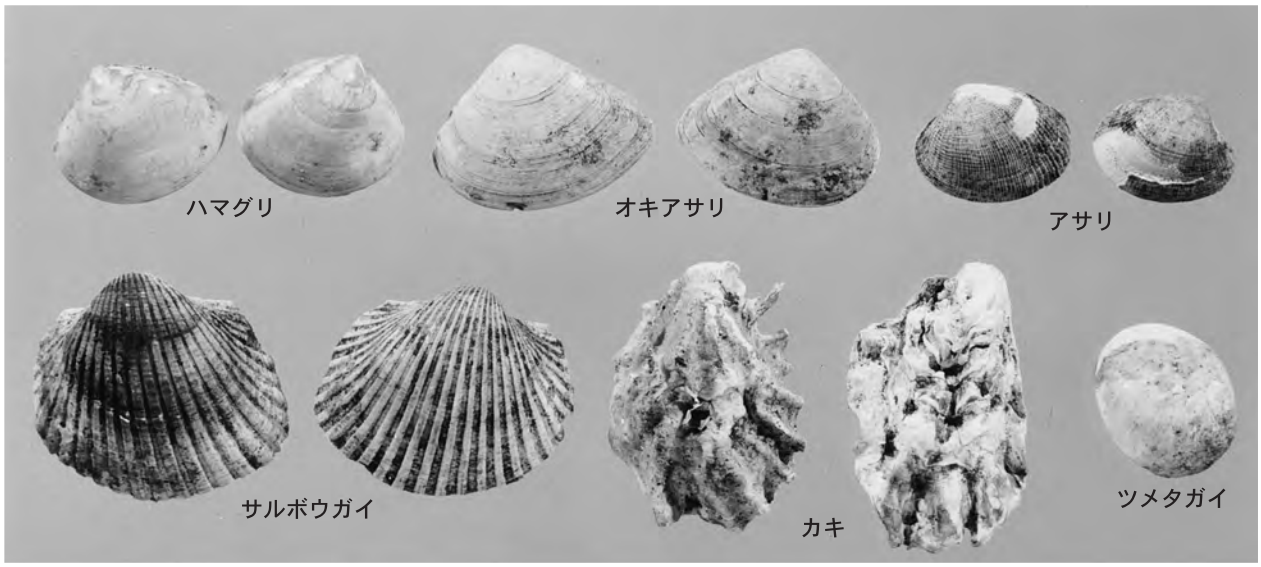


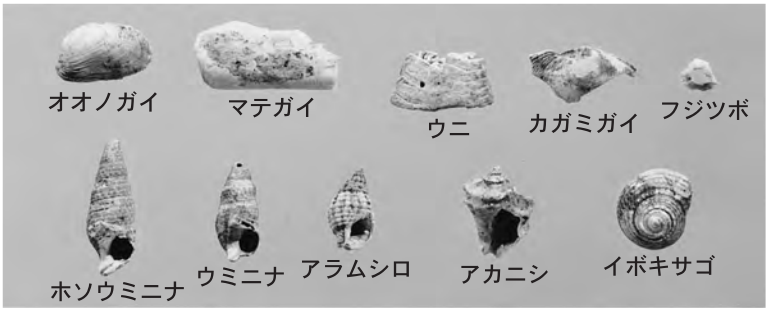
第４・７～10号土壙出土遺物

屋外埋設土器



調査区出土遺物





第１号土壙出土貝類

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ちばしそんのうしんやまいせき
書 名	千葉市園生新山遺跡
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	田中　英世
編 集 機 関	財団法人　千葉市教育振興財団　埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒260-0814　千葉市中央区南生実町1210　TEL 043-266-5433
発 行 年 月 日	西暦2007年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		経緯度		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
そんのうしんやまいせき 園生新山遺跡	ちばしいなげく 千葉市稲毛区 そんのうちょう 園生町1107-1他	12104	稲毛-70	35° 38′ 26″	140° 07′ 10″	20030801 ～ 20040213	1,200/ 12785.38㎡	園生団地12 棟建替事業
	ちばしいなげく 千葉市稲毛区 そんのうちょう 園生町1127-1	12104	稲毛-70	35° 38′ 26″	140° 06′ 10″	20060726 ～ 20060831	1,200㎡	園生団地11 棟建替事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
園生新山遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　２軒 土壙　17基 屋外埋設土器　１基	縄文土器 土製品・石製品	

千葉市園生新山遺跡

平成19年２月28日発行

編集・発行　独立行政法人 都市再生機構千葉地域支社
財団法人 千葉市教育振興財団
埋蔵文化財調査センター
千葉市中央区南生実町1210
TEL　043-266-5433

印　　刷　三陽工業株式会社
〒290-0056 市原市五井5510-1
TEL　0436-22-4348